

研究

言語少数派の子どもの体験と教科学習が連動した作文の意義

—母語と日本語による教科学習支援から—

なめかわ
滑川恵理子（大阪大学国際教育交流センター）

【B,C 研究の目的と価値・意義】本発表は、言語少数派の子どもの「体験」「母語・母文化」「教科学習」の3つが連動した「作文」の意義を明らかにすることを目的とする。子どもの体験をもとに作文を書くことの意義は「出来事作文」（齋藤2001など）で例証されているが、教科学習と直接連動するものではない。本発表は、Nessel他（2008）とCummins他（2011）も参考に、複数の言語と文化をもつ彼らの特徴を活かした「作文」を焦点化するという点で意義がある。

【D 研究方法】対象となるのは母語と日本語で教科学習を行なう「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」（岡崎1997）に基づく学習支援で、国語教材文（小学校5年生『大造じいさんとガン』）の読解と連動した作文と、作文を書く過程で得られた会話データ（子どもと支援者のやり取り）を質的に分析する。子どもは中国出身の女兒である。

【E 結果と考察】分析データの一つ目は会話データで、日本人支援者が主導し子どもが応答するやりとりから、子どもが主導権を握り支援者から適切な表現を引き出すやりとりへの変化が明確に分かるものである。言語化の源が子どもの「体験」にあるからこそ、子どもの主体的な会話参加が見られたと考えられる。二つ目は母語・母文化に根差した彼らの体験の特徴を示す会話データである。展開上重要な出来事を自発的に語り始めたとき、子どもは自然に日本語から母語に切り替えていた。彼らの特徴を考えると、彼らの体験や暮らしが母語・母文化に根差していることは十分納得できるものであり、子どもがどちらの言語でも安心して使える学習環境が望ましいことが分かる。三つ目は、教材文の主人公のガンと子どもが作文に書いたニワトリは「抜きんでた存在」である点で共通していることを示す対応表で、子どもは自分の体験と結び付け実感をもって教材文を理解していたことが分かる。「出来事作文」とは異なる教科学習と連動した作文として注目される。

.....

【引用文献】

岡崎敏雄(1997) 「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料』茨城県教育庁指導課, 1-7.

齋藤ひろみ(2001) 「実践報告 日本語学習初期段階における作文指導について考える—63期子どもクラスの作文の授業実践を基に—」『中国帰国者定着促進センター紀要』9, 財団法人中国残留孤児援護基金, 92-135.

Cummins, J. & Early, M. (2011). *Identity Texts: The Collaborative Creation of Power in Multilingual Schools*. Stoke on Trent, England: Trentham Books.

Nessel, D. D. & Dixon, C. N. (2008). *Using the Language Experience Approach with English Language Learners: Strategies for Students and Developing Literacy*. Thousand Oaks, California: Corwin Press.